

おいでませ!山口国体 感動をありがとう

会長 林 孝昭

東陽民泊協力会を設立し、1年余りの準備期間を経て、9月11日に開催された受入チーム抽選会で「岡山県チーム」を受け入れることが決定しました。

翌日から、各班の連絡会議を開催し、選手の配宿、歓迎会の準備、応援団の結成、お土産の準備と会員の気持ちが一つになり、万全の体制で大会を迎えることができました。

9月30日午後、協力会の熱烈な歓迎に戸惑いながらも選手の皆さんは笑顔で拠点施設の東陽コミュニティーセンターに到着。その日に開催した歓迎会で、既に選手と協力会の一体感を感じることができました。

10月2日の1回戦、是非勝利してほしい!! 応援団の必死の願いが届いたのか見事勝利しました。試合は2回戦で惜敗しましたが、その夜の送別会で時間が経つのも忘れ、夜遅くまで歓談したことは忘れられない思い出となりました。

10月4日午前、岡山へ帰る選手を見送りながら、選手、会員ともに涙している光景を見ているとほんとうに良い触れ合いをしたのだと感じました。

国体を通じて、元気と感動をいただき、そして新しい絆も生まれました。この絆を大切に、今後の地域づくりに繋げていきたいと思います。



美化班の思い出

美化班長 片岡邦夫

東陽地区民泊協力会美化班の仕事始めは、7月28日に行ったプランターへの花の苗の植え付け作業でした。

美化班メンバーは13名で、2丁目、3丁目、4丁目、5丁目の有志の方に参加いただきました。プランターは民泊家庭に各4個配布する計画で、下松市より60個のプランターをいただき、5丁目の花壇の周囲に配置して育てました。途中でサルビアが病気で枯れたり、各家庭への配布準備に入った時に、それまで立っていたマリーゴールドが一斉に横に倒れてしまったりと思わぬハプニングがありましたが、9月29日に各民泊家庭と生活の拠点となった東陽コミュニティーセンターに無事に配布することができました。

選手の受入れ後は、気持ちよく過ごしていただくために東陽コミュニティーセンターの清掃を担当し、10月4日に涙で選手を見送りました。

東陽で民泊された岡山の選手の方々にとって、きっと記憶に残る思い出になったのではないかと美化班一同喜んでいきます。美化班の皆様にはご協力有難うございました。



宿泊班長の思い出

副会長（宿泊班長） 阿部五郎

民泊を引き受けていただく家庭を確保することから活動を始めた。

東陽連合自治会を中心に民泊受け入れ家庭の募集、個別に訪問してのお願いで、予備家庭を含め12軒の民泊引き受け家庭を確保することができた。

選手団の受入れにあたって、拠点施設となる「東陽コミュニティーセンター」の入口には歓迎アーチが設置された。そして、それぞれの民泊家庭でも趣向を凝らした飾付、リース布団の受取、プランターの配置など、岡山県チームを、熱き心とおもてなしの心を持って迎える準備が進められた。

9月30日、待ちに待った選手団が到着し、選手の皆さんが歓迎アーチを目にして、「見て、見て、あれは何…？」と驚きの声を上げ、そして、「お世話になります！」と明るい声で挨拶されたときは、互いに心が開かれた一瞬でした。

歓迎会、試合、送別会まで、あっという間の短いお付き合いでありましたが、民泊家庭では、娘が遠方から帰ってきた思いで接しられ、選手たちは「お母さん、お母さん」とチョッピリ甘え、どの家庭でも、様々なドラマが展開されたようです。

民泊も終え、別れの朝、それぞれの民泊家庭の見送りの中、お互いに、涙、涙、感涙の中「ありがとうございました、お世話になりました」、「元気でネ、頑張るのヨ」、「さようなら」… 一言一言が心に残る別れとなりました。

チームの成績も予想以上の成果を持ち帰られたことで、地元岡山県でもとても喜んでいただけたとのことで、本当によかったと思いました。

国体選手を受け入れて

歓迎班長(民泊家庭) 山下正徳

我が家で国体選手の民泊受け入れの準備を始めたのは、7月に入ってからで、築後30年の古い家であり、天井板、襖の張替えをしたものの、若い選手を気持ち良く、リラックスして過ごしてもらうにはどうすればいいのか・・・。

山口県の手引きでは、とても厳しい決まりがあり困惑しましたが、自分が他家へ泊まった時、“これだけは”と思う事を準備し、選手を迎えました。

彼女達も民泊は初めてのようで、お互いに手探りの状態だったかもしれませんが大変喜んで感謝してくださり、私達も嬉しく思っています。

歓迎班としては、日頃からの良い仲間と、歓迎会、応援、お土産、送別会と手分けしながら準備し、選手の皆さんにも喜んでもらったように思い、最高のパフォーマンスができたものと自負しています。

岡山の皆さんとこうしたご縁ができ、これからも永くお付き合いできればいいと思っています。



民泊受入家庭の思い出

民泊家庭 加藤秀子

今回の民泊のお話があった時は、初めての体験でありとても不安でした。

幸い我が家には空き部屋があり、食事は料理班が作るとのことだったので思い切ってお引き受けしたのですが、当初、民泊という形での国体開催に少し疑問を感じていました。でも、東陽地区が受け入れたバスケット岡山県チームの皆さんとの触れ合い、試合の応援、そして別れを体験して、予想もしなかった充実感を味わいました。

その上、我が家に泊まった二人とはまさに一期一会。民泊を引き受けたからこそ、この出会いがあり楽しい思い出を作ることができたのですから、今ではとても良い経験をさせていただいたと思っています。

また、地域の人達との絆が深まったのも民泊の効果の一つではないでしょうか。

私のささやかな気苦労とは比べものにならないと思いますが、この国体に携わった多くの人々のご苦労に対し、心からお疲れ様でしたと言いたい気持ちで一杯です。



私は今回、初めて民泊を体験した。はじめにスタッフからその報告を受けた時には嬉しいという感情ではなく、不安でいっぱいであったことを思い出す。こんな最高の思い出に出会うことなど、私だけでなくチーム全員が想像していなかった。

私の民泊先は“貞弘さん”のお宅で、貞弘さんの笑顔と温かいお言葉ですぐに不安はどこかに吹き飛んでなくなった。気さくに私たちに心を開いてくださったことで、“貞弘さん”のことを“お母さん”と呼んでしまうほど、本当の家族のように接することができた。何不自由なく試合に臨むことができ、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

最近は何もかもが機械的で、人と人とのつながりが希薄化しているとよく言われる。私も実際にそういう傾向にあったかもしれない。そんな中、今回民泊をして人のぬくもりを感じ、純粋な優しさを感じられたことは本当に貴重な体験であったと思う。

本気で笑って、本気で泣いて、久しぶりにあんなに感激した。いつも目の前にある当たり前のことへの感謝の気持ちや、人と人とのつながりの大切さを改めて感じる事ができた。また、こういったことが色々なことの支え・土台になるのだと学んだ。この出会い、経験を大切に、人と人とのつながりを持つとともに、東陽の方々のような人のぬくもりを多くの人に伝えていけたらと思う。

東陽の皆さん、本当にありがとうございました。

岡山県バスケットボール成年女子

田上理賀

